令和元年度北方四島交流訪問事業（択捉島）に参加して

和歌山県教育庁西牟婁教育支援事務所
所　長　　塩路　隆人

１　はじめに

これまでの私にとって北方四島はとても遠い存在であり、領土問題については知ってはいるものの「他人事」であった。しかし、今回このような機会をいただき、実際の島の様子を見て、島に住むロシアの方々と交流する中で、領土問題解決には、日本人一人ひとりが「自分事」としてとらえ、解決のために少しでも行動を起こすことが大切であると感じた。

２　根室にて

９月１２日（木）

初めて根室を訪れた。１３時過ぎに根室駅に到着したが、駅の温度計は１７度であった。和歌山の蒸し暑さが信じられないくらいの気温に驚くとともに、持参してきた服の多くが季節外れであったと後悔した。駅周辺はほとんど人通りがなく寂しさを感じたが、北方領土返還に向けたスローガンが設置され、根室にとって北方領土問題が喫緊の課題であることを実感した。

１６時から、北方四島交流センター（二・ホ・ロ）で、結団式と研修会が行われた。正副団長、顧問、一般団員、政府同行者、通訳等を含め６４名の訪問団であった。団長である藤田寿香北海道教育庁根室教育局長からは、「本事業は２８年目を迎え、２万人を超える人々が交流していること」「島や島民への理解を深めてほしいこと」「言葉の壁はあるが、積極的にコミュニケーションをとってほしいこと」などの話があり、改めて交流訪問事業であることの意義を確認した。

３　えとぴりか乗船

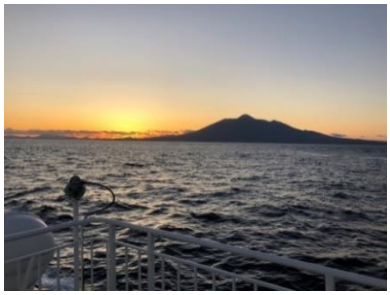
９月１３日（金）

８時３０分、千島会館前に集合し、専用バスにより根室港へ向かった。根室港では多数の関係者の見送りを受け、北方四島交流に使用されている客船「えとぴりか」に乗船した。９時３０分に出港し、１時間後の１０時３０分頃ロシアとの通過点（領域境界）を超えた。それと同時に日本の携帯電話会社の電波が届かなくなり、スマートフォンの電話機能やSNS等が使えなくなった。日本領土ではあるがロシアの支配を強く感じた瞬間であった。ちなみに、その後のスマートフォンの利用は船内のWi-Fiを利用することができたが、一度に多くの人が利用すると回線速度が遅く、また決め

られた場所で、決められた時間に限られており、不便さを感じた。

船は予定通り１３時頃、国後島古釜布(ふるかまっぷ)沖に到着し入域手続きを行った。古釜布港から来たロシアの国境警備隊に顔と名前を確認される簡単なものであったが、手続き終了まで２時間を要し、検査の様子を撮影することは絶対禁止とされ、張り詰めた雰囲気の中で行われた。

その後、船内で研修会が行われ、元択捉島島民の安田愛子さんから「当時は川が真っ黒になるほど鮭が溯上した」「鮭の上をネズミが走れたほどであった」という自然の豊かさやソ連軍が侵攻してきた時は「土足で上がり込んできた」「引き上げ命令が出て一旦樺太に渡り、その後北海道に渡った」など、貴重なお話を聞くことができた。



北方四島は曇りが多く、霧がかかっていることも多いと聞いていたが、この日は快晴に恵まれ、国後島の爺爺岳(ちゃちゃだけ)に沈む夕日が実にきれいであった。

４　択捉島にて

９月１４日（土）

〇択捉島上陸

朝７時、「はしけ船」がえとぴりかに横づけし、はしごをかけて「はしけ船」に乗り移り、港を目指した。港には大きな岸壁があり大型のタンカーでも接岸できるくらいの港だった。結構大変な思いをしての上陸だったが、「なぜ、えとぴりかは接岸させてくれないのか」と疑問を感じた。

択捉島に上陸し、港から専用のバスに乗り、択捉島の中心地である紗那へ向かった。車窓から見える街の様子は色とりどりの家がまばらに建ち、開発が少しずつ進んでいる様子も覗えた。また、幹線道路は舗装されていたが、それを逸れると未舗装道路が多く、通行する車は日本車の中古車が多く、特に４輪駆動の車が目立った。

〇表敬訪問（セレモニー）

２０１５年にオープンした文化スポーツ会館にてセレモニーが行われた。まずロシア側の代表者から挨拶があり「我が択捉島へようこそ」と言われたことに違和感があったが、両国が交流を進め友好関係を深めることの重要性を再確認したセレモニーであった。

〇墓参

紗那日本人墓地を訪れ、手を合わせた。墓地は景色のいい丘にあったが、日本の墓地のような墓石ではなく、また整備もほとんどされておらず、墓標があるだけの殺風景な墓地であった。

〇学校への訪問

小中高一貫校である紗那初等中等学校を訪問した。この日は休日であったが、多くの学生と教員が出迎えてくれた。その後、日本の学生とロシアの学生が一緒になって、ロシアの伝統文化や料理などを学ぶ共同学習が行なわれた。学習の最後にはすべての班が一堂に会し、発表会も行われた。どの班もうまくまとめて発表していたが、特にロシアの学生の発表は自分の言葉でしっかりと意見を述べられており、素晴らしいと感じた。

〇ホームビジット

１１の班に分かれ、ロシア人宅を訪問する「ホームビジット」が行われた。私が訪問した家庭は、両親と息子の３人家族であった。ご主人は仕事で不在であったが、奥さんと１６歳（高１）の息子さんが迎えてくれた。私の班は熊本県の中学校教諭と同じく熊本県の女子中学生（中３）と女子高校生（高３）の４人で訪問した。訪問してすぐに手料理が振る舞われ歓迎してくれた。会話が続くか心配していたが、通訳の方がいてくれたおかげで、楽しく会話することができた。事前の研修で、ウオッカの飲みすぎに気を付けるようにと何度も注意を受けていたが、アルコール類は出されず、少し拍子抜けのような感じであったが、温かい雰囲気の中で訪問時間が過ぎていった。

その後、港に戻り、来た時と同じ要領ではしけ船に乗り、えとぴりかで船内泊した。

９月１５日（日）

〇スポーツ交流～意見交流会

スポーツ交流会では、日本側から中標津高校女子少林寺拳法部の演武が披露された。その後、ロシアの子供たちにも少林寺の指導が行われた。ロシア側からは、ロシア人スポーツ指導者によるリレーやボール遊びなど様々な運動による交流が行われ、学生たちは大いに盛り上がった。

その後、学生は４つの班に分かれ意見交流会、私たち教育関係者もロシアの教員や教育行政担当者と意見交流を行った。交流では、「学生の学校生活や課題」や「教員の働き方」などについて話し合い、大変興味深いものとなった。

例えば、学生の学校生活は、日本と変わらない授業スタイルだが、部活動はなく、放課後はスポーツサークルや芸術学校に行き、そこで専門の先生が教えていることや、課題としては、スマホの学校への持ち込みは、「授業中はカバンに入れておく」などのルールを設

けたうえで認めているが、ルールを守らない学生も多く指導に苦慮していること、また、スマホゲームをしすぎることが問題となっており、保護者の中にはスマホからガラケーに戻す親も増えてきていることなど、日本と共通する教育課題も話された。日本の学生の部活動や塾などの生活を説明すると、「日本の学生はいつ寝るのか」と驚いていた。他にも、ロシアの教員の働き方は時間や内容がはっきりしており、給与も基本給の他に時間外手当や担任手当もあること、学校間の人事異動は基本的に本人が希望しなければ行われないことなど日本の制度とは違うことも聞くことができ、驚くことがたくさんあった。

しかし、制度の違いなどはあるものの、共通する部分も多く、保護者と連携を図りながら、熱意をもって指導していることがよく分かった。ロシアも日本も教員の学生に対する思いは同じだということが分かり親近感を持った。

交流会の最後に、「日本人が択捉島に住むことをどう思うか」と質問すると、「択捉島には、さまざまな民族が暮らしており、日本人が来て友達として暮らしていくことに問題はない」しかし、「様々な政治的な問題がある」「政治のことは政治家に任せておきましょう」との意見があった。

〇視察（温泉施設、市街地）

温泉施設と市街地を視察した。温泉施設は、小さくきれいなものではなかったが、ロシアの方々は水着を着て屋内外で温泉を楽しんでいた。数少ない娯楽の場なのだろうと感じた。

その後、紗那の市街地を散策した。店を見つけて初めてロシアルーブルによる買い物をした。何店か小型のスーパーマーケットがあり、食料品など生活必需品が並んでいた。

〇夕食交流会

初日に訪問させていただいた学校の教員やホームビジットでお世話になった方々など多く方々と一緒に、択捉島最後の行事である夕食交流会が行われた。歌やゲームを楽しみお互いの交流がさらに深まった。

５　出港～根室

ロシアの関係の方々の見送りを受け、択捉島を後にした。夕日に移る択捉島を見ながら、北方領土問題解決の難しさを改めて感じた。

その後、国後島沖で、来た時と同じ要領で出域手続きを行い、一路根室を目指した。９月１６日１１時頃、根室の街が見えた。ほっとした気持ちでいっぱいだった。

６　おわりに

今回の研修を終えて、日本とロシアの間には、まだまだ大きな壁があると感じた。例えば、えとぴりかを接岸できないことやセレモニーでのロシアの代表者の言葉、入出域の張り詰めた雰囲気など、国同士としての隔たりを肌で感じた。しかし一方で、択捉島に住むロシア人と交流を行う中で、彼らのやさしさを感じることもできた。彼らにとって択捉島は、戦後７０年を超え、そこが生活の場であり、ふるさとなのだろう。もちろん日本人である私たちには受け入れられないことであるが、それが現状であると感じた。

このような現状を踏まえたうえで、今の日本がどのように対応することが領土問題解決につながるのか、考えていく必要があると強く感じた。ロシアの学校の先生が「政治のことは政治家に任せておきましょう」と言ったが、私たち日本人はただ単に政治家に任せ、他人事のように「島を返せ」と言っても問題の解決には繋がらない。日本人一人ひとりが自分事としてとらえ、現状を知り、政治を少しでも後押ししていくことが大切だと強く感じた。私は教育関係者として、できるだけ多くの機会で現状を伝え、少しでも北方領土問題の解決に寄与したいと考える。

今回このような研修の機会を与えていただいた関係の皆様方に厚くお礼申し上げます。

最後に元島民の安田愛子さんの言葉を紹介させていただきます。

「我ふるさと北方領土は　近くて遠い　思い出の島」